Recent Research Trends on Trans-Exclusionary Feminism/Gender Critical Movement: A Narrative Review Focused on the Analysis of Rhetoric
2023 Vol.25 p.33 - p.46

トランス排除的フェミニズム/ジェンダー・クリティカル・ムーブメントに関する近年の研究動向

：レトリックの分析を中心としたナラティブレビュー

森田　真梨子　お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科
石丸　径一郎　お茶の水女子大学基幹研究院

要約

本研究では，トランス排除的フェミニズム/ジェンダー・クリティカル・ムーブメントについて，レトリックの分析を中心に国内外の研究のレビューを行った。直接的にトランス排除的なレトリックを，「トランスを抑圧主体として表象するレトリック」と「トランスとしての存在を否認するレトリック」に大別して分析し，さらにこのようなレトリックが批判を免れ流通する支えとして機能するものとして，「トランス排除を正当化する守りのレトリック」「トランスの包摂を非正当化する攻めのレトリック」という，合計 4 つの視点から整理を行った。また，排除的レトリックの拡散に寄与する社会の背景と，抵抗の方略に関する先行研究についても併せて概観した。

キー・ワード：トランスジェンダー，トランス排除的フェミニズム，ジェンダー・クリティカル・ムーブメント，TERF

I　背景と目的

本稿では，昨今のトランスジェンダー排除（以下，トランス排除）的フェミニズム・ムーブメントの高まりに鑑み，トランス排除とフェミニズムの双方に関連した国内外の研究のレビューを行う。トランス排除的フェミニズムの言説について，現状得られている知見を整理し，広く利用可能なものにすることを目的とする。

1. 用語の定義と本研究の射程

まず，本研究におけるトランスジェンダーという言葉の意味を確認する。本稿において，トランスジェンダーという言葉は，Stryker（2017）の暫定的な定義に則り，出生時に割り当てられた性別から離れていく人々（people who move away from the gender they were assigned at birth）を指す。つまり，二元的な男性/女性の枠組みの外にあるノンバイナリーやXジェンダーなどを含む包括的な用語として用いる。また，トランスジェンダーやシスジェンダーの集団一般を指す際は「トランスの人々」「シスの人々」という言葉を用い，人の集団というよりも，その概念や定義に言及する場合には，「トランス」「シス」という言葉を用いる。特にバイナリーなトランスの人々を指す場合には，「trans man」「 trans woman」の訳語として，「トランスの男性」「トランスの女性」という言葉をあてる。これは，「transman」「 transwoman」等，trans とジェンダーを一語

に繋げる表現がトランスを第三のジェンダーとして表象してしまうという指摘（Serano（2016，矢部訳 2023））に鑑みたものである。

続いて，本研究の射程を概観する。トランス排除が台頭する背景には，宗教的価値観や保守主義，フェミニズムなど複数のイデオロギーが関連していることが指摘されている（e.g., Libby, 2022；Yamada, 2022）。本稿で中心にレビューするのは，特にフェミニズムに関連したトランス排除的なレトリックである。

また，トランスの人々がシスの人々に比して不利に扱われる場面は，社会制度における差別，特定の言説や主張における排除，個人から向けられるトランスフォビアなど，マクロからミクロまで様々なものを想定することができる。その中でも，トランス排除的な主張は，トランスの人々をフェミニズムの主体や利益が守られるべき権利主体として十分に認めず，これらから不当に排除しようとする，コレクティブなムーブメントとして社会に顕在化してきている。特に，トランスの女性に対して，“女性限定”とされるスペース，地位，そして権利から排除しようとする動きが顕著である（Worthen, 2022）。一方，このような主張は社会制度にも個人の態度にも顕在化しうる。そのため，本稿は医療制度や法制度の不備を含む制度的差別，個々のトランス差別の経験や，トランスの人々に対する個人の嫌悪感を指すトランスフォビアなどを中心に扱うものではないものの，レビュー対象の研究内でそれらとの関連においてトランス排除的なフェミニズムが言及されることはありうる。

トランス排除的なフェミニズムの主張のことを，トランス排除的ラディカル・フェミニズム（Trans Exclusionary Radical Feminism，以下 TERFism），そのような主張を支持する者をトランス排除的ラディカル・フェミニスト（Trans Exclusionary Radical Feminist，以下 TERF）と呼ぶことがある。この言葉は，元々トランス包括的なラディカル・フェミニズム/フェミニストと区別するために造語された（Thurlow, 2022）が，昨今においては，言葉の文字通りの意味合いは形骸化し，単にフェミニズムに関連したトランス排除的な主張，さらにはフェミニズムと関連があるとは言えないトランス排除的な主張を指して用いられることもある（e.g., Thurlow, 2022；Bassi & LaFleur, 2022；堀, 2022）。フェミニズムと無関係に使用されるというこの傾向は，SNS 等，厳密な定義が必要とされない場においては特に顕著だと考えられるが，本レビューは学術的研究を対象とするものであるから，フェミニズムを冠した当該用語について，フェミニズムの背景を持つことを全く無視した定義がなされることは考えにくい。そのため，フェミニズムに関連したトランス排除に関する研究をレビューするにあたり，当該用語を検索ワードに含めることは妥当であると言える。

また，TERF は批判的な含意のある言葉であり，一般的に自らを名指すアイデンティティ・タームとしては用いられない。そこで，トランス排除的な主張を行う当人たちによって用いられるのが，「ジェンダー批判的（Gender Critical）」というラベルである（Thurlow 2022）。

2. 日本における昨今のトランス排除

2023 年 6 月下旬，LGBT 理解増進法の成立に伴い，自民党の有志議員による「全ての女性の安心・安全と女子スポーツの公平性等を守る議員連盟」が結成された。名称には「全ての女性」とあるが，“トイレや更衣室など「女性専用スペース」の利用や女性競技スポーツへの参加は生来の女性に限るための措置に取り組む”（産経新聞，2023）（傍点による強調は著者による）と記載のあることから，当該連盟の定義する「全ての女性」にはトランスの女性が含まれていないことは明らかである。ここでは定義上のトランス排除が生じている。

さらに，シス女性の安心・安全を確保するとい

いう目的のための方法としてトランスの女性の排除を目指すこと自体が,「トランスの女性がシス女性の被害の原因である」という差別的な因果関係の推定の上に成り立っており，そしてまた，それを明言すること自体がその差別を再生産していることは言うまでもない。ここに，定義上の排除のみでなく，ある属性の人々に無条件に暴力性を付与するという差別が見て取れる。加えて，このような方針は犯罪抑止の観点からも妥当性を欠くばかりか，外見による検閲の強化など，シス女性をも脅かす可能性がある（小宮, 2019）。

こうしたトランス排除的な主張は，X（旧Twitter）などの SNS 上でも拡散している。その契機の一つは，お茶の水女子大学のトランスジェンダー学生の受け入れに関する報道だと言われている（e.g., 堀, 2022）。この報道は 2018 年 7 月になされたが，田村（2020）のテキストマイニング分析によれば,「トランス女性」を含むポスト数は, 2018 年の 6 月には 30 件だったものが，7 月には 1087 件になり，1 月の間に約 36 倍もの伸びを見せている。また，これらのポストに高頻度で出現した単語には「犯罪」や「加害」といった言葉が含まれており，トランスの女性による犯罪・加害に言及する投稿が多くなされたことが推測できる。実際，山田（2019）や堀（2022）は，当該報道から間を置かずして，ネガティブな反応をするポストが増加したことを指摘している。こうした強い拡散性を持つプラットフォームを利用した排除言説が増加していることは注視に値する。

3. 本稿の臨床上の意義

トランスの人々を筆頭として，社会の中でジェンダーのあり方が非典型的であるとされる人々は, 日常的な差別やスティグマといったマイノリティ・ストレスを受けやすく，メンタルヘルスの問題を抱えやすいハイリスク群であることが従来の研究によって繰り返し報告されている（e.g., Hunter et al, 2021）。

マイノリティへの適切な心理的支援を担保するため，現在の米国では，博士課程の心理職プログラムが APA の認定を受けるにあたり, 年齢, 障害, エスニシティ，ジェンダー，ジェンダー・アイデンティティ，言語，出身国，人種，宗教，文化，性的指向，社会経済的状況などの文化的・個人的な差異や多様性にコミットメントすることが求められている（APA，2015）。また，トランス・アファーマティブなセラピー（Trans-affirmative therapy : TA）やクィアなアイデンティティをエンパワーする心理セラピー（Empowering queer identities in psychotherapy : EQuIP）など，実証的に効果が認められる心理的支援についての知見も徐々に蓄積されてきているところである（e.g., Tebbe & Budge, 2022）。

一方，2009 年の米国の調査によれば，トランスの人々が経験する困難について詳しいと答えた米国の心理職・大学院生は30%に満たなかった（APA TFGIGV）。日本では同様の調査が行われていないため，現状の把握が困難であるが，日本における主流の心理士資格である公認心理師や臨床心理士資格取得のカリキュラムにおいて，性的マイノリティを含む社会的マイノリティの支援についてのプログラムが存在しないことから，ジェンダー・マイノリティの人々が適切な心理的支援を得られることが, 制度的に推進されているとは言い難い。よって，適切なケアを得られるか否かは，個々の心理職の専門性や興味関心に大きく左右されてしまう。

このような状況下で，カリキュラムの改善や, 実証的に効果が認められたジェンダー・アファーマティブなセラピーの普及など，制度的・社会的な変化が必要とされるのはもちろんのことであるが，最低限，心理職が無知や偏見によってクライエントを傷つけることなく十分に力を発揮するためには，有害なステレオタイプやバイアスが適切に認識されている必要がある。

特に，昨今のトランス排除的な言説は，あから

さまにトランスジェンダーという属性を貶めるようなもののみでなく，後述する Breslow（2022）などが分析するように，他者の権利を保護するというレトリックを用いてトランスの権利の抑圧を正当化するようなものも多く，予備知識のないままにそういった言説に触れた場合，それが排除であることに気づかずに内面化してしまうこともありうる。トランス排除的言説のパターンや戦略，その背景を知ることで，排除的な言説に触れたときに適切に対処するための認知的資源を得ることができるだろう。

Ⅱ　方法

1. 文献の検索

英語の文献検索には Semantic Scholar を，日本語の文献検索には CiNii を用いた。検索キーワードは，英語文献においては「TERF」「Trans Exclusionary Radical Feminism」「Trans Exclusionary Radical Feminist」「Trans Exclusionary Feminism」「Trans Exclusionary Feminist」「Gender Critical」，日本語文献においては「TERF」「ターフ」「トランス排除的ラディカルフェミニズム」「トランス排除的ラディカルフェミニスト」「トランス排除的フェミニズム」「トランス排除的フェミニスト」「ジェンダー・クリティカル」「トランス排除　フェミニズム」「トランス排除　フェミニスト」で検索した。また，引用文献リストから，トランス排除的ムーブメントに関連があると思われる文献を追加した。

2. 文献の絞り込み

検索にヒットした文献のうち，トランス排除的フェミニズム/ジェンダー・クリティカル・ムーブメントを分析したものではないものを除外した。さらに，研究論文ではない雑誌の記事，対談記事，報告，エッセー，及び学部の学位論文を除外した。残った論文の中から，アクセス可能な研究，かつ英語または日本語で執筆された研究に絞った。

Ⅲ　結果

トランス排除的フェミニズム/ジェンダー・クリティカル・ムーブメントにおいて，トランスの人々を抑圧主体として表象する働きを持つレトリックと，トランスを抹消する働きを持つレトリックの特徴について考察する。次に，そのようなレトリックの差別性を否定し，正当性を付与する働きを持つレトリックについて分析を加える。最後に，そのような言説が社会の中で生じ，拡散されていくに至る歴史的・文化的・政治的背景，また抵抗の戦略について簡単なレビューを行う。

1. トランスを抑圧主体として表象するレトリック

トランスの女性をミスジェンダリングし，「男性」として位置付けた上で暴力性，加害性，特権性と結びつけて表象するレトリックや，トランス全体について，国家を脅かすものとして位置付けるレトリックである。

1)加害者化

トランスの人々を暴力的な主体や犯罪者として表象するレトリックである。

Ahmed（2016）は，平和なフェミニストのマーチにおいて，トランスの女性を“男の/オスのトランスジェンダー（male transgender）”と呼称し，複数人のトランスの女性の写真と共に，（彼女らとは無関係の）性犯罪のエピソードが記載されたパンフレットが配られた出来事を引き合いに，無条件にトランスの女性が暴力性と結びつけられて表象される状況に警鐘を鳴らす。このような状況を，Ahmed は“トランス＝暴力と死（Trans＝violence and death）”という簡潔な定式化によって表している。

堀（2022）は，日本のインターネット上，特にマイクロブログ型 SNS 上のトランスの女性の排除の状況を分析し，トランスの女性と性暴力の加害を結びつける言説において，トランスの女性の

身体は無条件に「ペニス＝男性身体」として表象され，「男性の性犯罪」と強固に結び付けられていることを指摘する。また，このような主張に対し，性犯罪の原因を社会・文化的要因ではなく身体性に求めることはむしろ性犯罪を自然化する機能を持つこと，個室では性器が露出する機会がないこと，他者にとっての排泄のアクセスという現実的な利益の侵害を是認し強化していることなど，複数の観点から批判を行っている。

また，Zanghellini（2020）は，ジェンダー承認証明書（gender recognition certificate）の取得を容易にするジェンダー承認法（gender recognition act：GRA）改正案に関するイギリスの議論を追い，「女性限定スペース」が脅かされると主張する排除的フェミニズムの言説に対する法的・哲学的な指摘を記述している。法的な指摘の１つ目は，そもそも現行の「女性限定スペース」の利用にあたり証明書の提出が必要とされていないため，改正は何の違いももたらさないというもの，２つ目は，仮に不正が生じた場合，法的に対処が可能であり，すでに十分なセーフガードが与えられているというものである。

2)特権化

トランスの女性を，特権を持った集団として表象するレトリックである。ここでは主にスポーツに関する議論を扱う。

Itani（2020）は，女子スポーツに関する言説において，「トランスの女性の方がシスの女性よりも有利である」といった主張が，女性の劣等性という性差別的な論理に基づいていることを明らかにする。また，同時に，フェミニズムと日本の保守の結びつきを指摘し，差別的な政治的アジェンダの推進を問題化する。

また，堀（2022）は，上記のような言説と，差別是正のためのアクションを「逆差別」と批判する言説の類似性を指摘する。さらに，先行研究では，明確に男女の線引きを行うことが不可能であること，無理な線引きは典型的でない身体のあり方をした人々への人権侵害を引き起こすことが指摘されてきており，実際に現行のシステムでは，テストステロン値が高い選手が参加に当たって値を下降させる投薬が必要とされるなど，ジェンダー・モダリティに関わらず排除が生じうる状態である。

Hines（2020）は，中国のシスの女性の選手らが，SNS 上で「女子スポーツで活躍するトランスの女性」として誤って表象され拡散された出来事に言及し，このような言説が，女性の身体のあり方を規定し，女性としてみなされ価値づけられる基準を決定するミソジニックな視点に基づいていると指摘している。

3）国家の脅威としての表象

トランスの人々やトランスという概念を，国家を脅かすものとして敵対的に位置付けるレトリックである。

Evang（2022）は，特にヨーロッパにおける anti-gender（反ジェンダー）の主張において，西洋の「ジェンダー・イデオロギー」が，ネオコロニアリズムの象徴であり，“自由”“人権”“多様性”といった言葉をもって自分たちを抑圧する，「民衆」の敵として描き出されていることを指摘する。このアジェンダは，トランス排除的フェミニズムと右派を結び付けている。実際には，このようなレトリックは，白人ヨーロッパ人を，救世主でありながら最も脆弱な被害者としても位置づける，人種化されたヒエラルキーを再生産しているという。

Schotten（2022）は，シオニストのレズビアン分離主義者をルーツとする，米国のユダヤ系フェミニズムとトランス排除との共通点を検討する。このレトリックは，抑圧と被抑圧を反転させ，抑圧されているものを，絶滅の危機を生じさせる有害な存在として表象する。ここに，パレスチナ人のテロリスト化と，トランスジェンダーをレイピストとして表象するイデオロギーの共通点を見出すことができると Schotten は述べ，これを“捕食型 TERFism（predation TERFism）”として概念

化する。ここでの概念的特徴は，マイノリティが，国家の絶滅を招く敵対的存在として表象されることである。

2. トランスとしての存在を否認するレトリック

この章では，トランスの人々の存在やアイデンティティが社会に存在しないものとして否定される際に用いられる戦略を分析する。

1）パターナリスティックな否認

その人にとって望ましくない結果を回避するためという理由づけをもって，人々がトランスとして生きる可能性を否定するレトリックである。「トランスであること」が人間主体とは切り離され，前者を抹消することで後者を保護するという構造を取る。

“もし私が今の時代に生まれていたら，トランスするように説得されていただろう（If I had grown up now, I would have been persuaded to transition）”といった「仮定法過去完了」の使用を指摘したのはBreslow（2022）である。この文法は，しばしば「自分もかつては男の子っぽい女の子だったが，今はシスジェンダーとして幸せに暮らしている」という個人的な経験の語りと共に用いられる。この語り自体は，シスとトランスを架橋するようなものでありうるものの，イギリスにおいては，子どもへの医療介入を批判するために用いられているのが現実である。このような言説は，“子どもの心理的生活（psychic life of the child）”を保護するためという理由づけで動員されるが，Breslow は，この“子ども”が現実の子どもというよりむしろ“子ども時代というファンタジー（fantasy life of childhood）”であり，パラノイアと投影を動因として成り立っていると指摘している。

また，Elster（2022）は，トランスの子どもたちに対して，“ケア（care）”や“心配（concern）”という語彙が頻繁に用いられ，しばしば「後悔を未然に防ぐため」というレトリックと併せて医療的介入への障壁として機能することを指摘している。また，未成年だけでなく，成人のトランスの人々についても，「精神疾患」であるとされ，「神の子どもが性的なイデオロギーの犠牲になることを防ぐ」ために，コンバージョン・セラピーを正当化する宗教保守の言説が存在する。Elster は，ケアや心配といった一見保護的な語彙は，その暴力性を覆い隠しつつ対象を破壊する効果を持っていると述べ，これを“陰湿な心配（insidious concern）”と呼ぶ。このような言説の元では，トランスの人々の自殺率やメンタルヘルスの問題における社会的な要因は全て否定される上，特に未成年の場合において，身体的移行に関する医療へのアクセスは一律に障害されることとなる。テキサスなど一部の州ではこれが制度化されており，このようなスタンスがトランスの人々の生を脅かすものであることが明示されている。

2）アイデンティティの詐称化

トランスの人々のアイデンティティや経験を不確かなもの，偽りのものとして一般化するレトリックである。

Billard（2023）は，“突発性性別違和，急性の性別違和（rapid-onset gender dysphoria : ROGD）”という概念を，誤情報の拡散という視点から分析する。この概念は，トランスジェンダーのアイデンティティが社会的な伝染病のごとく若者の間に広まっており，実際にはシスジェンダーの若者がトランスであると宣言するというものである。この概念を提示した研究は，公開されるが否や，研究者のグループから理論上と手続き上の不備を指摘されたが，それにも関わらず広く拡散され，トランスのアイデンティティが危険だということを裏付ける根拠として扱われるようになった（当該論文は，参加者を反トランス団体のウェブサイトから募っているため，サンプルが保守層に偏っていることなども指摘され（Ashley, 2020），APA（American Psychological Association）を含む61

の団体が，抗議の声明に署名している（CAAPS 2021））。Billard は，メディアやインフルエンサーなどを通じて誤った情報が戦略的に拡散されることで，トランスの人々の権利や存在そのものが危険に晒されていると述べ，批判を展開する。

また，堀（2022）は，日本の SNS におけるトランス排除に見られる言説について，「トランス猫」「セルフ ID」「自認女性」といった言葉が，トランスジェンダーを揶揄する文脈で使用されていることを指摘している。こういった用法は，トランスのアイデンティティを軽く見積もり，茶化し，正当性を否定するものであると堀は指摘し，シスの人々のアイデンティティは不問に付されたまま，トランスの人々のアイデンティティのみが問われ続ける状況は不平等であると批判する。

3）本質主義的否認

本質主義的な視点に基づき，トランスの人々のアイデンティティや経験を否認するレトリックである。

福永（2022）は，韓国の軍に所属していたトランスの女性であるピョン・ヒスの事件に言及する。彼女は，性別適合手術を受けたのちに「女性兵士」としての勤務の変更を希望したが，「男性器がない＝ハンディキャップ」という軍医の診断により除隊され，後に自死したことが報じられた。この報道の翌日，トランス排除言説で有名な論者が，「一人の男が死んだ」と投稿している。福永は，このような軍医の判断が，出生時の陰茎の存在を規範的な男性身体性の根拠とする近代医学の規範に根差し，彼女の身体を，女性の身体ではなく，規範的な男性身体から逸脱したものとして位置付けていることを指摘する。そして，自死の後に投稿されたコメントに見える排除的な価値観は，この規範に相乗しつつ，トランスの女性への憎悪を煽るものであると批判する。

また，Lee（2023）は，トランス排除的ラディカル・フェミニズムを支持する韓国の翻訳会社における言語翻訳の戦略を検討する。この翻訳会社では，英語の原文でトランスジェンダー男性を he（彼）と表している部分において，翻訳の際に男性代名詞を避け，新たな用語を生成しているという。これは，文字通り明示的にトランスのアイデンティティを否定するような行為であると言える。

同じく韓国の文脈において，シングルイシューの「女性優先フェミニズム」が，「生物学的女性」という旗印を掲げて団結していることが指摘されている（Lee, 2020；福永, 2022）。2015 年，韓国のミソジニーミラーリングサイトであるメガリアがゲイとトランスの女性に対する差別を禁じた後，「生物学的女性」至上主義のサイト「WOMAD」に大半のユーザーが移った（Lee, 2020）。連帯を志向しないこのフェミニズムは，「生物学的」女性/男性の区分と「女性」の被害性のみを絶対視し，「男性」であるとされる存在全てに対して明示的に差別や暴力を行使する点で，後述する「ジェンダー・クリティカル」のような立場とは対照的である。

4）共同体経験からの阻害

「女性としての経験」や「女性としての歴史」を共有していない者として，トランスの女性を「女性」やフェミニズムから疎外するレトリックである。

小宮（2019）は，排除的フェミニズムからトランス女性に向けられる上記のようなレトリックに対し，共通性と差異という 2 つの視点から応答する。シスとトランスの女性の経験に共通する経験は全ての女性の関心事となり，差異のある部分についても女性内部の多様性として捉えることができるという視点である。小宮はその例としてトランス・ミソジニーの概念（Serano（2016，矢部訳 2023））を挙げる。男性優位的な性差別の蔓延する社会の中で，女性へと移行するトランスの女性はより嘲笑の対象となりやすく，過剰に「女らしさ」を付与されたミソジニックな女性像として描かれやすい。ここに，小宮は 2 つの視点の重なり合いを見出している。

3. トランス排除を正当化する守りのレトリック

1，2 の言説を正当化するにあたり，自説に信頼性を付与し，差別性を否定する機能を持つレトリックである。これらの言説は，トランス排除を行う主体を「普通の」「理性的な」存在として表象し，トランス排除から差別性を脱色することで，排除的言説がスムーズに流通する素地を強化する。

1）加害性の否定

排除的な主張と併せてあえて包括的な用語を用いたり，差別ではないことを明言したりするなどして，加害性を否定するレトリックである。

代表的な戦略の一つには，「TERF」という言葉の「ジェンダー・クリティカル」への置き換えがある。これを分析したものが Thurlow（2022）だ。Thurlow は，イギリスの文脈において，「TERF」という言葉が「ジェンダー批判的」という言葉に置き換えられていっている現象を分析し，この現象が運動の名称変更にとどまらず，リブランディングの効果を持っていることを指摘した。背景には，トランス排除的な主張を掲げた運動が社会の支持を得られなかったことがある。そこで，名称のリブランディングと共に，一見トランスに対して融和的な方針に転換していった。“トランスの否定（anti-trans）”は，“女性の肯定（pro-woman）”になり，“トランス排除（trans-exclusion）”は“sex に基づいた権利（sex-based rights）”に変化した。一方で，トランスの人々の権利を支持する人々は“トランス権利活動家（trans rights activists）”または“TRAs”として有徴化されるようになった。

このようなジェンダー・クリティカルの立場は，一部のトランスの人々を明示的に包摂し，トランスの権利を支持すると明言することすらある。ただし，Thurlow は，ジェンダー・クリティカルの立場の根本的な主張が引き続き生物学的本質主義に基づいていることを指摘し，差別性が隠蔽されているだけであると分析する。一方で，著名なトランス排除的フェミニストの一人が，ジェンダークリティカル・フェミニストの立場にある者たちが，（「男性」ではなく）トランスの女性という言葉を用いたり，ジェンダー・アファーマティブな代名詞を用いたりすることを批判している例を引き合いに出しつつ，TERF とジェンダー・クリティカル・フェミニストの間に生じている分断も描き出されているのは興味深い。

また，Libby（2022）は，牧師向けに配られた「トランスを理解するためのガイド」を端緒として，アメリカの福音派と排除的ラディカル・フェミニズムの繋がりを分析し，その中で，宗教的保守がトランス排除的フェミニストの立場を単なる「フェミニスト」の立場として普遍化していることを明らかにする。

2）模範的な当事者の包摂

模範的な一部の「当事者」を容認するレトリックである。しばしば，このような「当事者」は，「模範的でない」トランスの人々や，トランス・アクティビストなど，自らのレトリックに批判的な層を線引くために用いられる。

Gwenffrewi（2022）は，J.K.ローリングが，ジェンダー・クリティカルの人々はトランスヘイターではないと主張し，その根拠として“単に自分の生活を送りたいだけのトランスの大人たち（trans adults who simply want to live their lives）”に対しては共感的であると述べたことに言及する。ここで語られているのは，模範的なトランスの人のみの条件付き包摂である。さらに，ローリングは「トランスの女性は性的興奮を求める男性」という趣旨の明白な差別発言をした論者を尊敬すると述べており，Gwenffrewi は，そのスタンスの矛盾を指摘している。

また，Yamada（2022）は，日本の文脈において，性同一性障害（Gender Identity Disorder，以下 GID）とトランスジェンダーが保守によって区別されて扱われ，前者のみが包摂されていることを指摘している。

これに関連して，堀（2022）は，LGBT 理解増

進法に関する政治家の発言の分析において，共にGender Identityの訳語である「性同一性」と「性自認」という言葉を，それぞれ異なる意味を持つものとして解釈し，前者を「統一性・一貫性・持続性」のあるものとして，後者をそのような要素を欠くものとして表象する言説を指摘しており，これも，GIDとトランスを区別した上で前者を包摂するレトリックの延長線上にあると言えるだろう。

3）自然化

「客観的」な裏付けがあるものとして，自身の主張を自然化するレトリックである。

トランス排除において，自説の正当性を主張するために頻繁に用いられるのが，“sexに基づく権利（sex-based rights）”である。この概念は，「女性の権利」がsexに基づくものとする一方で，“gender identity”の概念をこれを侵害するものとして位置付け，対立構造を生み出す（Hines, 2020）。この主張は，1970年代からトランス排除のレトリックとして根強く力を持ち続けている。このレトリックにおいて，sexは性器，生殖器，染色体やホルモンの構成といった「自然で固定的」なものとして，一方genderは流動的なアイデンティティとして扱われる。Hinesは，このような主張が，生物学に照らしても，sexとgenderの概念の成立の歴史に照らしても全くの誤りであり，生物学的に多様な染色体，ホルモンや性器等のあり方を無理やり性的二形のイデオロギーに当てはめようとしているだけであることを丁寧に論証する。さらに，このような主張が，今までsexの運命論に抗おうとしてきたフェミニズムの成果を台無しにしてしまうこと，一元的にsexを抑圧の根源とすることで，全てのシス女性が同じように抑圧されているという誤った前提に立つことになることを指摘する。

藤高（2022）は，しばしばトランス排除的フェミニズムに見られる，「物質的な身体を無視している」というバトラーやクィア理論への批判について検証を行う。藤高はこの批判を正面から投げ返し，GID＞トランスという枠組みの中で，診断という紙切れに存在を握られることによって最も身体性を無視されているのは他ならぬトランスであることを論証する。

4. トランスの包摂を非正当化する攻めのレトリック

トランスの人々の権利を保護しようとする者こそが暴力的で非理性的な存在である，というイメージの構築に関わる言説である。自己正当化の言説と表裏一体であると言えるだろう。このような言説は，トランス排除を批判する人々に向けられるだけでなく，トランスの人々がターゲットになることもある。

1）暴力・抑圧・差別的主体としての表象

批判や抵抗を暴力，抑圧，差別としてみなしたり，その原因として表象するレトリックである。

Ahmed（2016）は，暴力に対して異を唱えるものが，むしろ暴力の原因として措定されるメカニズムを指摘している。例として，フェミニズムのマーチでトランスフォビックなパンフレットが配られた際，それについての抗議がマーチの妨害と見做されたという事案を挙げる。

また，自身の言説が「トランスフォビック」であるとして検閲され，抑圧されて黙らされているという主張もよく見られるものである。Ahmedは，このような言説が，暴力への煽動と言論の自由をあえて区別しないことによって，暴力の煽動を正当化していると批判する。

藤高（2021）もまた，「TERFと呼ばれて暴力的な扱いを受ける」という言明に対して検討を加える。ここで，トランスの人々は，「TERFに対して暴力的な扱いをする人々」の一部として一方的に表象される。藤高は，トランスの人々が一般的に社会の中で周縁化されていることが顧みられず，加害者と被害者が逆転するメカニズムが働いてい

ることを指摘し，これを「想像的逆転」と呼ぶ。

2）偏向した主体としての表象

Gwenffrewi（2022）は，Scotsman と The National という 2 つの新聞のトランスフォビックな記事を分析している。The National の記事は，J.K.ローリングの投稿を批判する人々を「怒れるオンライン・エコーチャンバーの中にいる人々（Those in the outraged online echo chambers）」と呼び，Gwenffrewi は，この表現がトランスを妄想的なもの，取り合う正当性のないものとして描いているとして批判している。

5. トランス排除が拡散する社会背景

紙幅の関係から詳述はできないが，レビューにあたり見出された，トランス排除が拡散する社会背景について簡単に概観する。

1）宗教保守・保守主義

多くの研究ではトランス排除と宗教右派や保守派との繋がりが指摘されている（e.g., Evang, 2022；福永, 2022；Hines, 2020；Libby, 2022；Yamada, 2022；Shimizu, 2020）。一方で，逆に，「宗教保守から女性を守る」というレトリックを用いる freethinker の系譜（Lofton, 2022）や，メディアによる二項対立的なイメージの影響（Gusmeroli, 2023）も指摘されている。

2）SNS 上の言説の拡散性

旧 Twitter のような SNS 上では，議論の背景や流れが把握しにくく，過激なデマや意図的な曲解が拡散されやすい上，一度拡散してしまった情報の訂正が困難である（堀, 2022）。研究上の誤情報の拡散は，しばしばトランスの人々の医療アクセスにも影響を及ぼしうる（Billard, 2023）。また，SNS 上の言説は国境を超えて拡散しやすいことも特徴であり，日本のトランス排除言説が英語圏や韓国語圏から輸入された可能性が指摘されている（Shimizu, 2019；福永, 2022）。

3）性差別，性差別への抵抗運動の盛り上がり

公的な領域が男性基準で構成されていることが未だに女性が公共空間で暴力被害にさらされるリスクを高めており，それゆえに「女性の安全」がフェミニズムの重要な関心事であり続けている（小宮, 2019）。そして，この社会構造を背景とする#MeToo 運動などの性差別や性犯罪への反対運動の盛り上がりの中で，抑圧されていた怒りや告発の声が，怒りを向けやすい対象に誘導された可能性が指摘されている（Shimizu, 2020；Lee, 2020）。

4）新自由主義

韓国においてトランス排除的フェミニズムが力を持った背景として，Lee（2020)や福永（2022）は新自由主義的の影響を上げ，競争の中で熾烈にパイを奪い合う新自由主義的構造のもと，シングルイシューの女性優先フェミニズムが生じたと指摘する。

6. 抵抗の戦略

多くの論文で，トランス排除的ムーブメントに対する抵抗の方法が模索されていた。

1）トランスアファーマティブな空間の創造

J.K.ローリングのトランスフォビック発言以降，ハリー・ポッターのファンアートにおいてトランスの表象が増加していることが指摘されている。現実世界に代わり，二次創作においてトランス・アファーマティブで安全な空間を積極的に作り上げることは，有効な抵抗であるのみならず，コミュニティのケアの一つの形でもあるとされる（Cromwell, 2023）。また，Awcock（2023）は，スコットランドで公共の場に貼られるトランス・インクルーシブなステッカーを分析し，これらを支援や連帯，そしてトランス排除やジェンダー保守的な動きへの抵抗を公然と可視化するものとして意義を強調した。

2）教育

Carrera-Fernández & DePalma（2020）は，学校やその他の教育機関で生じうるジェンダーに関する暴力について述べ，トランス排除的な言説に抵抗する，トランス・インクルーシブなペダゴジーの創出の必要性を提言している。

3）実存への問いを避ける

Ahmed（2016）は，“私たち，ただ対話できない？（can’t we just have a conversation?）”と，トランスの人々に対して排除派との対話を求める声の暴力性を指摘している。そのような要請は，議論が成立しないことを，繰り返し自分自身の存在を疑う声に座礁し，その対話に参加することを拒む人々の責任に帰してしまう。また，トランスの存在を消し去る土俵である「トランスの女性が女性であるか」といった問いに関する議論を根本から避けることの重要性も指摘されている（Bettcher, 2017）。

4）連帯して声をあげること

複数の研究で，トランスを含むマイノリティ間の連帯，トランス内部での連帯が意義深いものとして述べられている。あるいは，本稿のレビュー対象となった研究群もその一部であると言えるかもしれない。Bhardwaj（2023）の研究では，ロンドンの南アジア系マイノリティのグループが連帯してケアや抵抗の活動を行っている様が詳細に描かれている。これらのグループは，DV やジェンダーに基づく暴力の被害者をケアしたり，トランスフォビアに反対するポスターなどを配布したり，コロナ禍で食糧支援を行ったり，政府の支出削減に抗議するなど，幅広くケアと抵抗の運動を行っている。また，DiCesare & Cram（2023）は，1970年代のフェミニズムとトランスジェンダーの断絶が継続しているというナラティブに抵抗し，歴史的にトランスジェンダーの包摂を志向するトランスフェミニストの存在が記述されることの可能性を見出した。そして，トランスの個人としての声が矮小化された経験から，Gwenffrewi（2022）は，トランスのコレクティブなナラティブを紡ぎ，集合的に声をあげることで変化を生み出せる可能性に希望を見出している。

Ⅳ　考察

1．研究の特徴

研究の全体を概観すると，レトリックそのものや社会的・政治的背景について分析と考察がなされているものが多かった一方で，トランス排除的フェミニズムに参画していく個人の経験的背景や心理的機序をミクロに扱った研究は見られなかった。特に，運動の扇動によって情動が動員され，拡散が広範化していく機序と背景については，ミクロな分析も必要であると考えられる。

2．トランス排除的フェミニズムと本質主義

直接的にトランス排除として機能するレトリックのうち，ほとんどが「トランスの女性」に限定して言及するものであり，「トランスとしての存在を否認するレトリック」内の「パターナリスティックな否認」以外，トランスの男性やノンバイナリーの人々に直接言及するものは見られなかった。

これは，トランス排除的フェミニズムが，必要に応じて，フレキシブルに，sex の概念を基盤にした本質主義を呼び出していることを示唆している。

小宮（2019）は，トランスの男性が女子トイレを当然に利用するようになった場合，見た目が完全にマスキュリンである人も女子トイレを利用することになり，むしろ「シス男性の犯罪者を見分ける」ことが困難になると指摘している。そのような議論をあえて避けるか，もしくはトランス男性には女子トイレを利用して欲しくないと要請するのであれば，それは本質主義の面からは一貫性を欠くと言える。

従って，トランスの女性を排除する主張における本質主義は，排除の主張に先立つものとして一貫して存在しているわけではなく，むしろ，トランスの女性への排除の情動を説明する衝動に駆ら

れたとき，予め存在していたものとして突如出現するのである。

3. 現代的差別との関係性

レイシズムやセクシズム等，社会で差別の概念が共有されるに従い，ある集団の劣等性を殊更に主張することで市民社会の賛同を得られる機会は少なくなった。そんな社会変化に呼応し，Kinder &Sears（1981）やMcConahay（1983）が象徴的レイシズム/現代的レイシズムという概念を提唱して久しい。現代的な差別の形態が，マイノリティの被差別性を否定し，想像上の特権を付与することによって自らの非抑圧性を主張するという形で顕在化するという指摘は現在でも有効であるばかりか，ポスト・トゥルースの時代と言われる昨今，さらに先鋭化しているとすら思われる。実際，このような逆転現象を用いた差別の形態が有効なものとして見なされているのは，トランス排除ムーブメントと移民排斥やシオニズムとの構造的類似性が指摘されている（e.g., Schotten, 2022）ことからも見て取れるだろう。

マイノリティの声，抑圧されてきた声を聞くべきであるという主張は，フェミニズムやポストコロニアリズムが通底して行ってきたものであり，その貢献によって存在することが可能になった声も多いだろう。だからこそ，「我々を脅かす存在」としての特定の属性の集団が想定され防衛や反撃の呼びかけがなされる時，それが何を含意しているのか注意が払われねばならない。「抑圧された者の声」として差別的な言説が発されることはありうるし，マイノリティであることは，自他のマイノリティ集団を差別しないことを意味しないのである。

4. 限界と展望

本レビューについて，扱った範囲，媒体，言語の側面から限界を述べる。

本研究は，検索のキーワードに TERF や gender-critical といった特定の単語を用いているため，例え内容がトランス排除的なフェミニズムに関連するものだったとしても，検索ワードを使用していない論文についてはカバーしきれていない。トランス排除的ムーブメントに関する研究は領域横断的に行われており，検索ワードに一致しないような表現や，関連する特定の事象や人物等の名称が代わりに用いられていることも考えられる。また，検索ワードが用いられるようになる以前のトランス排除的な言説の分析についても，本研究の範囲外となっている。

さらに，本研究は，トランス排除の中でもフェミニズムに関連するものを射程としているため，トランス排除の中のごく一部の言説しか扱えていないことには留意する必要がある。例として，家庭内のトランスフォビアによる排除や，LGBT コミュニティの中でのトランスの女性の排除（Serano（2016，矢部訳 2023））などが指摘されており，トランス排除が生じうる領域は社会システム全域にわたる。

また，今回は媒体を研究論文に限定してレビューを行ったが，トランス排除的なフェミニズムについての分析は，非公式な媒体（ブログや SNS など）や雑誌の特集，また単行本などにおいてなされていることもある。例として，2019 年に日本で刊行された「女たちの 21 世紀」がトランス排除に関する特集を組んでいるが，研究論文誌ではないため，今回のレビュー対象からは外れている。また，書籍においては，トランスの男性のフェミニズムへのアクセスのしづらさ（周司, 2021）など，今回の論文誌レビューで言及が見られず，扱えなかった問題系に触れられているものもある。これは今後の課題としたい。

言語的な限界についても触れる必要がある。今回のレビューでは，研究者の言語的アクセシビリティの問題により，英語と日本語で書かれた論文のみを参照したため，他の言語による研究で得られた知見は反映されていない。本レビューの中に

は，英語圏の外の研究者によって英語で執筆された研究も含まれているが，これが英語圏外で行われた研究の氷山の一角にすぎないことは想像に難くない。トランス排除的ムーブメントは，トランスナショナルに展開する側面が少さくないとはいえ，個別の状況は，その国や地域の政党，文化・宗教・言語，医療アクセスの状況，法制度などに依存する。そのため，得られた知見が一般化されることが必ずしも適切であるとはいえず，各地域における研究が必要な分野である。また，今回のレビューではインタビュー研究のように，集合的に個人的な視点を分析するものは得られなかったが，研究手法も文化圏によって傾向に違いが生じてくる可能性がある。言語的コロニアリズムに陥らぬよう多言語の研究が参照されることを願いつつ，本研究が手引きとして研究発展の助けとなることを望む。

文献

Ahmed, S. (2016). An affinity of hammers. *TSQ: Transgender Studies Quarterly*, 3(1-2), 22–34. http s://doi.org/10.1215/23289252-3334151

American Psychological Association Task Force on Gender Identity and Gender Variance. (2009). Report of the task force on gender identity and gender variance. Retrieved October 15, 2023, from http://www.apa.org/pi/lgbt/resources/policy/gender-i dentity-report.pdf

Ashley, F. (2020). A critical commentary on "rapid-onset gender dysphoria." *The Sociological Review*, *68*(4), 779–799. https://doi.org/10.1177/0038026120 934693

Awcock, H., & Rosenberg, R. (2023). Palimpsests of trans rights: trans-positive stickers and the contestations of transphobia in public space. *Journal of Lesbian Studies*, 1–18. https://doi.org/10.1080/108 94160.2023.2229216

Bassi, S., & LaFleur, G. (2022). Introduction. *TSQ: Transgender Studies Quarterly*, *9*(3), 311–333. https://doi.org/10.1215/23289252-9836008

Bettcher, T. M. (2017). Trans Feminism: Recent Philosophical Developments. *Philosophy Compass*, 12(11), e12438. https://doi.org/10.1111/phc3.12438

Bhardwaj, M. (2023). "That's what we think of as activism": Solidarity through care in queer Desi diaspora. *Journal of Lesbian Studies*, 1–25. https:// doi.org/10.1080/10894160.2023.2228652

Billard, T. J. (2023). "Gender-Critical" Discourse as Disinformation: Unpacking TERF Strategies of Political Communication. *Women's Studies in Communication*, *46*(2), 235–243. https://doi.org/10.1 080/07491409.2023.2193545

Breslow, J. (2022). They would have transitioned me: third conditional TERF grammar of trans childhood. *Feminist Theory*, *23*(4), 575–593. https://doi.org/10.1 177/14647001211046442

CAAPS. (2021). ROGD Statement — Coalition for the Advancement & Application of Psychological Science. Coalition for the Advancement & Application of Psychological Science. Retrieved September 19, 2023, from https://www.caaps.co/rog d-statement

Carrera-Fernández, M. V., & DePalma, R. (2020). Feminism will be trans-inclusive or it will not be: Why do two cis-hetero woman educators support transfeminism? *The Sociological Review*, *68*(4), 745–762. https://doi.org/10.1177/0038026120934686

Cromwell, B. (2023). Perverse polyjuice: Trans Harry Potter spitefic as a response to J. K. Rowling's TERF wars. *Transformative Works and Cultures*, 39. https://doi.org/10.3983/twc.2023.2441

DiCesare, M., & Cram, E. (2023). Transfeminist possibilities and remembering the 1970s. *Women S Studies in Communication*, *46*(2), 244–251. https://d oi.org/10.1080/07491409.2023.2193547

Elster, M. (2022). Insidious concern. *TSQ: Transgender Studies Quarterly*, *9*(3), 407–424. http s://doi.org/10.1215/23289252-9836064

Evang, J. A. M. (2022). Is "gender ideology" Western colonialism? *TSQ: Transgender Studies Quarterly*, *9*(3), 365–386. https://doi.org/10.1215/23289252-983 6036

藤高 和輝 (2021). ポストフェミニズムとしてのトランス？——千田有紀「「女」の境界線を引きなおす」を読み解く. ジェンダー研究：お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報, (24), 171–187. https://doi.org/1 0.24567/0002000120

藤高 和輝 (2022). 誰が本当に身体を無視しているのか?: トランス排除と〈紙〉としての身体. 解放社会学研究 = The liberation of humankind : a sociological review : official journal of the Japanese Association of Sociology for Human Liberation, (36), 110–119. https://cir.nii.ac.jp/crid/1520014967587127936

福永 玄弥 (2022). フェミニストと保守の奇妙な〈連帯〉：韓国のトランス排除言説を中心に. ジェンダー史学 = Gender history, (18), 75–85. https://cir.nii.a c.jp/crid/1520012711613288960

Gusmeroli, P. (2023). Is gender-critical feminism feeding the neo-conservative anti-gender rhetoric? Snapshots from the Italian public debate. *Journal of Lesbian Studies*, 1–18. https://doi.org/10.1080/10894 160.2023.2184908

Gwenffrewi, G. (2022). J. K. Rowling and the echo chamber of secrets. *TSQ: Transgender Studies Quarterly*, *9*(3), 507–516. https://doi.org/10.1215/232 89252-9836176

Hines, S. (2020). Sex wars and (trans) gender panics: Identity and body politics in contemporary UK feminism. *The Sociological Review*, *68*(4). https://do i.org/10.1177/0038026120934684

堀 あきこ (2022). 近年のインターネットを中心とした「トランス女性排除」の動向と問題点. 解放社会学研究 = The liberation of humankind : a sociological review : official journal of the Japanese Association of Sociology for Human Liberation, (36), 120–141.

Itani, S. (2020). The "Feminist" Discourse on Trans Exclusion from Sports. *Gender Studies*, (23), 27-46. https://doi.org/10.24567/00063792

Kinder, D. R., & Sears, D. O. (1981). Prejudice and Politics: Symbolic Racism Versus Racial Threats to the Good Life. *Journal of Personality and Social Psychology*, *40*(3), 414–431. https://doi.org/10.1037/0 022-3514.40.3.414

小宮 友根 (2019). フェミニズムの中のトランス排除 早稲田文学, *10*(21), 132–142.

Lee, H.-J. (2020). A Critical Study of Identity Politics Based on the Category "Biological Woman" in the Digital Era: How Young Korean Women Became Transgender Exclusive Radical Feminists. *Journal of Asian Sociology*, *49*(4), 425–448. https://do i.org/10.21588/dns.2020.49.4.003

Lee, S.-B. (2023). Radical feminist translations and strategies: A South Korean case. *Translation Studies*, *16*(1), 101–117. https://doi.org/10.1080/1478 1700.2022.2147582

Libby, C. (2022). Sympathy, fear, hate. *TSQ: Transgender Studies Quarterly*, *9*(3), 425–442. http s://doi.org/10.1215/23289252-9836078

Lofton, K. (2022). Pulpit of performative reason. *TSQ: Transgender Studies Quarterly*, *9*(3), 443–459. http s://doi.org/10.1215/23289252-9836092

McConahay, J. B. (1983). Modern racism and modern discrimination: The effects of race, racial attitudes, and context on simulated hiring decisions. *Personality & Social Psychology Bulletin*, *9*(4), 551–558. https://doi.org/10.1177/0146167283094004

産経新聞 (2023).「自民女性を守る議連」１００人突破, 全メンバー　専用スペース「生来の女性に」 The Sankei News Retrieved September 19, 2023, from https://www.sankei.com/article/20230720-XRFN6X UMKBOUDDUOTX3UTMKOUM/

Schotten, C. H. (2022). TERFism, Zionism, and Right-Wing Annihilationism: Toward an Internationalist Genealogy of Extinction Phobia. *TSQ: Transgender Studies Quarterly*, 9(3), 334–364. https://doi.org/10. 1215/23289252-9836022

Serano, J. (2016). *Whipping Girl: A Transsexual Woman on Sexism and the Scapegoating of Femininity*. Seal Press. (セラーノ, ジュリア 矢部 文 (訳) (2016). (ウィッピング・ガール トランスの女性はなぜ叩かれるのか サウザンブックス社)

Shimizu, A. (2020). "Imported" Feminism and "Indigenous" Queerness: From Backlash to Transphobic Feminism in Transnational Japanese Context. ジェンダー研究：お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報, *23*, 89–104. https://doi.org/10.24567 /00063795

周司 あきら (2022). トランス男性によるトランスジェンダー男性学 大月書店

Stryker, S. (2017) *Transgender History: The Roots of Today's Revolution*. Seal Press.

田村 貴紀 (2020). テキストマイニング分析から見るトランス排除社会運動の台頭―「トランス女性」という単語を含む Twitter 記事を題材に― Retrieved September 10, 2023, from https://researchmap.jp/tamuratak/misc/30120719

Thurlow, C. (2022). From TERF to gender critical: A telling genealogy? *Sexualities*, 136346072211078. https://doi.org/10.1177/13634607221107827

Worthen, M. G. F. (2022). This is my TERF! Lesbian Feminists and the Stigmatization of Trans Women. *Sexuality & Culture*, *26*(5), 1782–1803. https://doi.or g/10.1007/s12119-022-09970-w

山田 秀頌 (2019).「女性専用スペースからトランス女性を排除しなければならない」という主張に, フェミニストやトランスはどう抵抗してきたか WEZZY Retrieved October 15, 2023, from https://wezz-y.com /archives/63653

Yamada, H. (2022). GID as an acceptable minority; Or, the alliance between moral conservatives and "gender critical" feminists in Japan. *TSQ: Transgender Studies Quarterly*, *9*(3), 501–506. https://doi.org/10.1215/23289252-9836162

Zanghellini, A. (2020). Philosophical problems with the gender-critical feminist argument against trans inclusion. *SAGE Open*, *10*(2), 215824402092702. https://doi.org/10.1177/2158244020927029